D.R.マッケンジーと金沢英学院

D.R.McKenzie and Kanazawa Eigakuin English Language School

後藤田　遊　子

はじめに
1．カナダ、金沢から神戸までのマッケンジーの足跡
2．金沢英学院の成立と経緯
3．金沢英学院における英語教育活動
4．マッケンジーの英語教授法
まとめ

はじめに

明治初期プロテスタント福音主義キリスト教の日本伝道が開始されたころ、宣教師達は伝道手段として教育事業、医療事業、社会事業にたずさわった。中でも英語教育事業が目立っていた。

北陸のプロテスタント福音主義キリスト教の伝道が開始されたのは、アメリカ北長老教会外国伝道局（Presbiterian Board of Foreign Missions ）が派遣したトマス・ウイン（Thomas Clay Winn）宣教師が１８７９年石川県金沢の地を踏んでからである。彼は石川県中学師範学校の英語の教師をするかたわら福音伝道に励んだ。そして１８８１年日本基督一致教会金沢教会（現日本基督教団金沢教会）の設立にたずさわった。

少し遅れて１８８７年にカナダメソジスト教会は、ダニエル・マッケンジー（Daniel Rial McKenzie）というカナダの自給伝道師の青年を金沢に派遣した。彼は官立第四高等学校（１８８７年創立）の英語教師として赴任したのであった。彼の活動は北陸においてトマス・ウインほど知られていないが、明治期の北陸における日本メソジスト教会の発展に貢献した宣教師であり、１８９０年、北陸最初の日本メソジスト教会である日本メソジスト金沢教会（現日本基督教団金沢長町教会）の設立にたずさわった。これは実際には、英語学校という形態で設立し、教会（当時は講義所と呼ばれた）を併設したものであった。

カナダメソジスト教会関係、北陸の日本メソジスト教会等の資料からマッケンジー宣教師の北陸での活動をたどってみると、（1）英語学校（教会）の設立（2）孤児院の設立（3）能登における福音伝道の開始の３つが特徴づけられた。（1）と（2）は始めに述べたように、教育事業、社会事業を行いながらの福音伝道の典型例であり、（3）に関してはメソジスト教会特有の巡回伝道といえる。

カナダのトロント大学ビクトリアカレッジの資料館（The United Church of Canada/Victoria University Archives ）には、カナダメソジスト教会日本伝道の資料が豊富に保存されていて、私はそこからマッケンジーに関するいくつかの資料を入手することができた。それらの資料を読み進

後藤田　遊　子

めるうちに、マッケンジーが英語教師として日本で初めてGouin Methodという英語教授法を採用していることが分かった。これに関するテキストブックを出版していることも分かった。そこで本稿では、これまであまり知られることのなかったマッケンジーの日本における４０年あまりの伝道生活のうち、カナダから来日し、北陸から神戸に移るまでの足跡を紹介する。それから、上記（1）に該当する英語学校設立とその経緯、英語学校における英語教育とマッケンジーが採用した英語教授法について述べ、それらを通して、マッケンジー在任当時の英語学校における英語教育がどのようなものであったかを考察してみる。

なお、日本メソジスト教会の伝道活動や(2)、(3)に関しては本稿の主旨ではないのでふれない。

１．カナダ、金沢から神戸までマッケンジーの足跡

マッケンジーは１８６１年２月１６日カナダのオンタリオ州Oxford County, Colloden に７人兄弟の末子に生まれた。彼の父はアイルランドのSligoからの移住者であるが、母親はカナダ生まれであった。１６歳になると、オンタリオ州Kingsvilleの雑貨屋で働くこととなった。その間に彼は、自伝で記述するところによると、“ came the great crisis in my life”に襲われたのである。彼はリバイバル集会に連続して参加し、他の100人等の若者と一緒に回心し、教会と連なりキリスト者として生きることを決心した。彼は、新しく回心したからには他の人々を感化し奉仕をすることによって回心の証しをしなければならないと決心し、身寄りのない少年達を集めて話しをするようになった。そうして彼のキリスト者としての奉仕の歴史が始まったのである。彼はその地方の平信徒説教者として説教をするようになり、その後牧師になるためにビクトリア大学に入学し１８８６年に卒業した[1)]。

そのころカナダ・メソジスト・ミッションの日本伝道の開拓者の１人であるイビー（Charles Samuel Eby)は、日本政府が各地に官立高等学校を設立するにあたり英語教師を求めていることを知り、カナダメソジスト教会に向けて人を派遣してくれるよう要請した。マッケンジーは教会機関誌Christian Gurdianに掲載されたイビーの教師要請の記事を読み、応じる決心をしたのだった。彼は１８８７年の夏に日本へ向かった。彼の赴任地は石川県の金沢であった。横浜から汽船で四日市まで行き、そこから小蒸気船で名古屋まで、さらに汽車で敦賀まで、そこから小蒸気船で大聖寺まで、そこから16里の道を人力車に乗って金沢へたどり着いたのであった[2)]。彼は石川県の金沢にできた官立高等学校、つまり第四高等学校の英語教師に着任した。１８８８年、彼の婚約者イザベル（Euphemia Isabella Pearson ）が来日、その年の８月に結婚、翌年には一人息子のアーサー(Arthur Pearson McKenzie)が誕生している。

マッケンジーは１８８８年から１８９１年までと１８９８年に約半年間第四高等学校で英語を教えた。当初自宅で英語聖書研究会を開いていたが、本来の福音伝道の目的をはたすためミッションに金沢伝道を促した。１８８９年カナダ・メソジスト・ミッションは宣教師サンビー（John William Saunby ）を金沢伝道に本格的に着手するため金沢へ派遣した。１８９０年金沢の中心部に建物を購入、平素は英語の教授、日曜日は教会としての機能を果たす英語学校を設立した。これ

は実質的には、日本メソジスト金沢教会（現日本基督教団金沢長町教会）の設立である。１８９２年には私立各種学校の認可を得て金沢英学院と改め、共に伝道活動をすることになった日本人伝道師楠正道が院長、マッケンジーが教頭となって運営していくこととなった。こうして金沢における伝道の基盤ができると、福井、富山と北陸伝道が開始された。マッケンジーは１８９１年に第四高等学校を退職し福井に転任した。１８９３年にサンビーは病のため帰国し、マッケンジーは再び金沢へ戻り、金沢、福井、富山３県にまたがった日本メソジスト教会北陸部会長となり金沢を去るまでその任にあたった[3)]。

彼の金沢での活動で特記することは、先に述べたように金沢英学院と孤児院の設立である。孤児院は日露戦争の孤児達を対象にしたもので、特にマッケンジー夫人の努力が実り発展していく。彼はまた、北陸の海岸沿いを巡回伝道し、特に能登半島に福音伝道をし、教会を建てた最初の宣教師である[4)]。

１９１０年に彼は北陸への伝道任務を終え、日本におけるカナダ・メソジスト・ミッションの書記、会計となった。その最初の仕事は神戸に行き関西学院の経営に加わることであった。

ちょうどアメリカ、カナダに母体を持つメソジスト主要３派（米国メソジスト監督教会、同南メソジスト監督教会、カナダメソジスト教会）は１９０７年合同し、日本メソジスト教会となっていた。２０世紀に入り日本の国公立学校が次第に整備されてくると私立学校の教育活動が伸び悩んできていた。その影響は米国南メソジスト監督教会が１８８９年に設立した神戸の関西学院も例外ではなく、伝道と教育を進めるためにはカナダメソジスト教会に経営の協力を求めることが最善の策であることが決断されたのであった。この合同案を積極的に支持し、関西学院の教育ミッションに参加することは、カナダメソジスト教会にとっても意義のあることと強力に訴えたのがマッケンジーであった[5)]。１９１０年には米国南メソジスト監督教会とカナダメソジスト教会の共同経営が正式に決定され、マッケンジーは合同後の新しい理事会の理事となって経営に参加することとなった。１９１０年には１９０８年に認可された専門学校令に基づく神学部で英語を教授することになった[6)]。ちょうどこの年に、金沢英学院は教会の経営からはずれ楠正道院長個人の経営となる。

神戸から東京に移ってからは、引退（1934年）まで東京にとどまり日本メソジスト本郷中央会堂においてミッション活動に従事した。引退後いったんカナダに帰国するが、すぐに日本に戻り息子の家族と共に暮らし、１９３５年４月１日に日本でその生涯を閉じたのである[7)]。

２．金沢英学院の成立と経緯

先に述べたように、マッケンジーはサンビーと協力して金沢英学院という英語学校を設立した。

石川県史第４編（１９３１年発刊）には、「１８９０年１月カナダ・メソジスト伝道会社の事業で、正則英語学会という名称の英語学校が開設され、英人サンビーが教頭となる。１８９１年９月には私立金沢英学院と名称を改め、英人マッケンジーが教頭となる。この頃県立中学校がまだ不十分な時期だったので、その不足を補い優秀な人物を輩出した。また金沢英学院は１９１０年カナダ・メソジスト伝道会社から独立して邦人経営となる[8)]」と記されている。そこで、まず金沢英学

後藤田　遊　子

院の成立の過程を述べてみる。

カナダのアウトルック誌（The Missionry Outlook）の１８９０年８月７日付に掲載されたサンビーの書簡には、いかにして金沢英学院が成立したかが良く分かるように記述されている。それによると、彼は１８８９年にそれまで滞在していた山梨尋常師範学校の御雇教師を辞めて金沢に来たのである。彼はまずこの地で居住権を得るためには、マッケンジーのように官立学校の御雇外国人教師になる、日本人のための語学学校を作る、あるいは日本人の個人教授になる、という３つのいずれかの方法しかないことに気づいていた。そうして選ぶべき道は、日本人のための語学学校を作るのが最良の方策と結論を出し、英語学校を設立することにしたのであった。しかし、東京にあるようなごく一般的なミッションスクールではなく、他の地元の学校と競合しない小規模であるがキリスト教の影響力の大きい学校を目指したのであった。

彼は彼の日本語教師を３年間つとめ、英語が堪能な保坂健司を校長にし、保坂がサンビーを英語教師として雇う形で１８９０年に金沢英学院をスタートさせた。建物は前述のようにマッケンジーが目をつけていたもので、町の中心部にある、県の建物や学校に囲まれた古い重厚なものであった。内部には３つの教室と１つの読書室、待合室、そして１５０人は収容可能な講義室を配置した。財政的には、建物と学校用設備をミッションが負担し、残りの費用の全てを学校が支払い、保坂がその任に当たるというものであった[9]。この建物については、１９４０年発行の日本メソジスト金沢教会５０周年を記念した「教会小史」によると、「カナダ・メソジストミッションは金沢兼六園広坂通りに５００坪の土地と１００坪の建物を購入した。この建物はかつて前田藩主がオランダ医学者を招聘した折りに住居として使用した由緒ある風雅な建物だった[10]」となっている。（現在の日本基督教団金沢長町教会には当時の建物を忍ばせる欄間がいくつか残されている。）

サンビーの書簡に戻ると、「おもな生徒は役人や学校の教師などで、彼らの時間帯に合わせて、夕方の４時から６時まで授業をした。毎日曜日には日本語と英語の両方で聖書研究会をした。第四高等学校初代英語教師でアメリカ人のベントン（Orland Benton）とマッケンジーの両夫妻が加わり、第四高等学校から学生の参加を募った。日曜日の朝には聖書に興味のある約２５人の若者が聖書等の英語の講義を聞きに来るようになった。時には日曜の夜に集まることもあった。そこで、次の学期からは日曜日には通常の英語の礼拝をするつもりである、また時には週日の夜にも英文学等の講義をするつもりである。このように学校は順調に進み始めているが、今年の１月、スタートしたばかりの頃、参加者は非常に少なかった。人々はこの小さな学校の経営者が、集めた月謝を持ち逃げする山師ではないかと疑いの念を抱いていたからである。しかし、次第に人数はふえていき、多いときで３０人に達し、この夏休みまでに平均１５人以上の参加者となった。そして来年にはすくなくとも３０人から４０人になるだろうと見込んでいる。学生のほとんどは学校の教師で、できるだけ早く英語を習得しようと望む知的な男性達である。また高等中学校の受験のために英語を学ぶ学生が何人かいて、そのうちの２人は前回の試験で入学した。幸いなことに第四高等学校に入学した後も、彼等は聖書の勉強に参加し読書室をよく訪れてくれる[11]」と記されている。

この時期になると、国の奨励により英語を理解する日本人が増えてきた。彼らは生の英語を聞き

たがっていた。しかし通常の教会の日曜礼拝に参加することは奨励されていなかった。そこで、ベントンやマッケンジーがハイレベルの英語読解の指導にあたり、その他に日本人やアメリカ人の協力を得て、色々なレベルの学生に対応できるようにしたのであった。

以上が金沢英学院設立の年１８９０年８月のサンビーの書簡に記された金沢英学院の成り立ちである。

このようにして発足した金沢英学院は、教会と英語学校が同居する形で１９１０年まで続いた。１９０５年より１９１２年まで満７年間金沢教会で牧師をしていた太田虎吉牧師は、「私はマッケンジー博士が神戸関西学院に転任せられしをもってその後を引き受けたるなり。其のころは金沢教会は金沢英学院と称し、その講堂を教会となし牧会伝道をなしたり。広坂１番地にあり面積５０１坪にして建物は昔時前田藩主が蘭医を招聘し住居せしめたるものにして、神殿のごとく又西洋館のごとくその３方に広き廊下あり巍然たる大建物なり。平素は英語を教授し、日曜日には之を教会に用いたり。当時の校主兼教師は楠正道氏にして当地駐在の男女宣教師を助く[12]」と回想している。１９０８年の日本メソジスト教会金沢部会において、「金沢英学院は明治２３年より今日に至るまで継続し近時毎年２００名の生徒在籍し、現在は１００名を有す、石川県の学校官吏は大に望を属せり、１週１回太田牧師は生徒の為に聖書を講義す[13]」と報告されている。

１８９０年代の後半から１９１０年代頃までというのは日本の近代教育制度の骨格が出来上がった時代である。また近代産業の発達により国民生活が向上し、就学率の上昇が見られるようになった。１９０７年には６年生義務教育が実現した。１８９９年には新中学校令により尋常中学校が中学校と改称され、同時に実業学校、高等女学校令も制定された。これにより、高等普通教育（中学校）、女子の高等普通教育（高等女学校）、実業教育（実業学校）の３つが編成された。高等教育については、１９０３年に専門学校令が公布され、中等教育を受けた者が専門の学芸を学ぶための専門学校が学校体系の中に位置付けされた。また、高等普通教育機関としての高等学校は大学予科としての性格をもち、それに続き帝国大学が増加していったのである[14]。また、特記すべきは１８９９年に私立学校令が交付されたこと、文部省訓令第１２号により公認の学校での宗教教育が禁止となり、明治学院や青山学院などが認可を取り消され各種学校となったことである。

金沢英学院は教育を通したキリスト教伝道ではあったが、こうした流れに沿って、１８９５年には陸海軍受験科を設け、陸海軍諸学校に入学する者を養成している。１８９７年には学則を改め、予科、正科、英文学科、陸海軍受験科、会話専修科、夜学部を設けている。１９０３年には高等受験科を設け、中学校卒業生に限り入学を許可し各種専門学校入学試験に対応する学力を養成し、就業年限は短期を３ヶ月、長期を１年とし[15]、各種学校の域を出ることはなかった。

１９１０年に金沢英学院は教会と分離することになった。先の太田虎吉牧師は、「この教会の地所は石川県会の決議によりて遂に買収せらるるところとなり、明治４３年坪金２０円５００坪金２万円、建物移転費金４０００円にて買収せられたり、現在の警察署これなり。他の１坪は金沢市の用に供す。此れに於て教会は地を広坂通香林坊に移し約１年を要して移転改築したり、牧師館を造る場所なきを以て他に借家を借りたり[16]」と教会が移転したことを回想している。

後藤田　遊　子

金沢英学院は教会の手から離れ、前述の金沢英学院校主兼教師の楠正道の個人経営となっていった。その後の金沢英学院の経緯についての記録がみあたらないのであるが、今井一良氏の「北陸英和学校と金沢英学院--金沢にあった２つのミッション系男子校の歴史」によると、キリスト教色を拭っていったこと、楠正道が１９４０年に７３年の生涯を閉じた後廃校となったが、正確な記録が発見されていないということである[17]。

３．金沢英学院における英語教育活動

まず、先に引用した「教会小史」から、その当時の金沢英学院でのマッケンジーを中心とした伝道師達の英語教育活動のようすを述べてみる。

金沢英学院設立当初の伝道師金沢敬次郎は１８８９年から１８９０年頃サンビーから英文学等を学んでいる。彼は、「当時の北陸部長はサンビー博士で非常な活動家だった。伝道の余暇には金沢英学院で英語教授をして伝道の一助をしていたくらいであった。なにしおふ金沢は北陸道における文化の中心地であったから、そこに学ぶ男女の青年が多数あった。院長は楠正道氏、教師にはサンビー博士、及び金沢高等学校で英語教授をしていたマッケンジー博士であった。その当時宣教師達は英語教授の媒介を以て、多くの青年の魂をキリストに結びつけんと大々的努力を払っていたものである。現今とは異なり宣教師に対する尊敬とその信任とはなかなか深いものであったから、確かに伝道は効果的であったと思われる。青年達も英語の他に何物かを獲得したいという野心をもっていたものだから、かなりの学生、青年達が募集してきたのである。金沢英学院としては学識もあり、人格者でもある宣教師なれば、県下ではなかなかに評判もよかった。[18]」と記している。彼はその当時はまだ神学校で勉強中の伝道師（教職試補）だった。

１章からたびたび触れてきた楠正道のことは前述の今井一良氏の「北陸英和学校と金沢英学院--金沢にあった２つのミッション系男子校の歴史」に詳しく記述されているが、それによると彼は１８９１年にサンビーから受洗している。彼は中学校初等科程度の学歴しか持っていなかったが、石川県下の英語学校の英語教師を務めるほどの英語力があった。また、人格的にもすぐれた教育者であったことが伝えられている[19]。こうしてみると、金沢英学院は設立当初サンビー、マッケンジー、楠正道、サンビーの日本語教師の保坂健司が中心となって英語教育を行っていたということがわかる。なお、保坂健司は同志社出身、日本語教師ということではあるが、彼の経歴を記す資料が見当たらないのと教会の部会報告に名前が見当たらないので、伝道師としての活動はしていなかったのではと思われる。

倉長巍は１９００年から１９０５年まで日本メソジスト金沢教会に任命をうけた牧師である。彼は「その頃我教会には「金沢英学院」なる高等予備校があって、マッケンジー先生の外、篤学の士楠正道氏が教授していた。中学卒業生および高校の１年生程度の青年数十名が学んでいた。当時石川県立第一中学校の英語主任教師をしていた渡辺為二郎とは筆者が新潟の北越学館に学んでいたころの同窓であったので、久しぶりに会って旧交をあたため、お互いに便宜を得た。１９００年頃、石川県立第一中学校の英語教師達は、マッケンジー宅で２年間ほど毎週一回シェークスピアの戯曲

を学んだ。これには渡辺氏は大いに感謝しておられた[20]」と記している。

ここで述べられている石川県立第一中学校は１８９１年中学校令改正によって各府県が尋常中学校の設置を義務づけたことから石川県尋常中学校として発足したものである。その後中学校の増設があったが、県下では最も古い伝統をもった一中と呼ばれエリート意識をもたれていた。石川県立第一中学校の卒業生の進路は高等学校から帝国大学へ進学、次に陸軍諸学校へ進学、さらに海軍諸学校へ進学の順であった。上級学校進学の受験科目のうちで難解なのが「英数国漢」で、高等学校や軍関係諸学校受験希望者は正課の授業では安心できず放課後地元出身の教師の特別指導を受けたり市井の補習塾に通ったりした[21]。また、石川県立第一中学校は、中学校の英語教師が増えたこと、外国人の宗教観と国家主義的教育が合わない等の理由から１８９９年以降外国人教師の任用をやめている[22]。このことは宗教教育禁止の文部省訓令等が影響を及ぼしていることと思われるが、金沢英学院が学則を変更したり、高等予備校化していった背景には石川県立第一中学校のような教育事情が一因としてあると思われる。

さらに、倉長巍は、「１９０１年頃日基の毛利君（日本基督一致教会金沢教会第４代牧師）、聖公会の大橋麟太郎君（聖公会初代伝道師）および筆者が連合して広坂通りの家の二階を借り入れ約一カ年間夜学校を開き互いに英語を教えたものである[23]」と記しているが、日本基督一致教会金沢教会の牧師や聖公会の伝道師が協力して英語を教授していたことは非常に興味深いことである。倉長巍（1867-1949）は山形日基教会で受洗し、東洋英和神学部を卒業している。青年の集会でカナダ人宣教師の通訳をしている[24]ところからみるとかなりの英語の使い手であったと思われる。このころになると、サンビーが帰国し、マッケンジー、楠正道が中心となって英語教育をし、倉長巍が牧師活動をしながら英語教育にも協力していたようすがわかる。

日本メソジスト教会第十四回年会金沢部会長報告（1902年）によると、倉長牧師時代、１９０２年に日本メソジスト金沢教会では２１名の受洗者がいたが、そのうち７名が高等学校生徒だったそうである[25]。１年に２１名も洗礼を受ける者が出るのは現代日本におけるプロテスタント教会ではまれなことである。しかもその内の７人が高校生であったことからみると、当然のことながら金沢英学院はキリスト教伝道の場であることが改めて確認できる。金沢英学院と金沢教会を切り離さず２０年間同じ建物の中で活動してきた理由もそこにあると思われる。金沢英学院が当初サンビーが書簡で述べていたように小規模な英語学校でありつづけたこと、小規模であるがゆえに、そこを訪れる者達に直接キリスト教の影響を与えることができたと言えるであろう。

次に、１９０４年に金沢の第四高等学校で文部省夏期講習会が開催され、マッケンジーが英語教授として招かれていたことについて述べるが、そのことにふれる前に、明治期日本の英語教育について少し述べてみる。

明治期の英語教育の歴史を前半と後半に分けてみると、前半は、１８８７年頃までで、高等教育は宣教師をはじめとしたキリスト教徒あるいはキリスト教的教育を受けた英米人が英語教育の担い手となっていた。この時代に英語を学んだ日本人は外国人教師から直接教えを受けるほかなく、いわゆるDirect Methodによって学んだのである。この頃に欧米に留学した日本人はこうした教え

を受け、更に欧米で英語を学び、帰国してからは日本における英語学の中心的役割を果たしたのである。後半は１８８７年以降日露戦争（１９０５年）頃までで、洋書がどんどん日本に入ってくるようになり、「中外英字新聞」（1894年創刊、1923年廃刊）、「英語青年」等の程度の高い英語雑誌が創刊され、日本人の英語研究が盛んになっていく。またこの時期音声学の研究も始められ、発音記号も紹介された[26]。

中外英字新聞１１巻９号１９０４年には金沢の第四高等学校で文部省夏期講習会が開催されたことが掲載されている。国力の発展とともに中学校の数が激増し、日本人英語教師の数も増えてきたので、教師の質を充実させるために文部省は１９０１年から、現職の英語教師の質の向上と、英語教授法の改良のために毎年夏期講習会を催すこととなった。マッケンジーはこの講習会に招かれたのである。以下はその記事である[27]。

「７月２５日より８月１３日まで３週間金沢の第四高等学校において催せし文部省の英語夏期講習会の景況を講習員の一人たる某氏より聞くに。講師は岡山高等学校の教授英人ガントレット氏。前金沢高等学校教授マッケンジー氏（カナダ人）及び広島師範学校教授エリオット氏（カナダ人）にして講習員は正員が７０名外に傍聴者が２０人にて。注意すべきは第四高等学校長吉村寅太郎氏及び石川県第一中学校長久田氏も日々傍聴したりと云う。時間は午前８時より１０時２０分にて３講師の内最も評判よかりしはガントレット氏であったらしく。同氏は石川県第一及び第二中学校の１年級生徒３６人に習字のレッスンを與へ、同第５年級生徒に会話及び作文を教えて実地教授法を講習員に示し。マッケンジー氏は同第３年級生徒に得意のNatural Methodを応用して教えたるが同じレッスンを４～５日間に亘りて教えたり。又エリオット氏にはOral Readingと云う題にて５年級の中学校生徒にreading を教えたるが其の前に emphasisやpauseの説明を與へたり。またStudy in Englishと云う題にて是又４～５日間に亘れるレクチュアを述べたりと云う。最も多く出席したるはガントレット氏にして最も出席数の少なかりしはエリオット氏なりと云う。閉会式に於て吉村校長の云く願わくば３～４年間同じ講師の下に同じ場所に於て夏期講習会を開きたし左すれば十分に実功を挙げ得るならむと。」

マッケンジーが評価された「得意のNatural Method」は次の章で述べるが、彼の英語教育活動は金沢英学院の中だけではなく、文部省主催の講習会のような公の場でもなされていたのである。

さて、ここに登場するマッケンジー、ガントレットそしてエリオットは、実はいずれも前述のイビーの呼び掛けにこたえた自給伝道隊であった。カナダ・メソジスト・ミッションの自給伝道隊の宣教師達の英語教育活動は、マッケンジーの英語教育活動にも影響を及ぼしたであろうと思われるので、参考までに述べておく。

イビーは１８７６年にカナダ・メソジスト教会から日本伝道のための第２陣として派遣された宣教師である。山梨で英学塾の教師を務めるかたわら開拓伝道に着手し、１８７８年建物を借り、英語学校を開設し、同所で甲府メソジスト講義所（現日本基督教団甲府教会）を合わせて発足させた[28]が、この方式は金沢でサンビーが金沢英学院を開設した方法と同じである。１８８１年甲府を去り、彼は東京に戻って知識人や学生への伝道に着手するために自給伝道隊の結成を募った。彼が組織し

た自給伝道隊とは、日本の公・私立学校の教師をして自活しながらその地方の伝道に献身する志願伝道者のことである。このイビーの自給伝道隊の募集に対して、イギリス、アメリカ、カナダから１２名の有能な青年が志願したという。つまり、この自給伝道隊というのはイビーの私設宣教師団と言ってもよい。しかし、イビーは志半ばにして１８９４年に離日している[29]。

マッケンジーやサンビーのように北陸伝道に従事した宣教師には、ダンロップ、クラミー、エリオット、コーツ等の名前が挙げられる。これら全ての宣教師達がイビーの呼び掛けにこたえた自給伝道隊であった。重複する部分もあるが、これらマッケンジー以外の宣教師の教授歴を「来日メソジスト宣教師事典」[30]から抜粋してみる。

サンビーは１８８６年に来日。 山梨師範学校、山梨中学校で英語を教授する。１９２１年離日している。著書にThe New Chivalry in Japan (Toronto: Missionry Society of the Methodist Church and the Young Peoples' Forward Movement, 1923)がある。

ダンロップ (John Gaskin Dunlop)は１８８７年来日。浜松の中学校、長野の師範学校で英語を教授した後、長老派の宣教師となって活躍する。

クラミー (Eber Crummy)は１８８８年来日。熊本の第五高等学校で英語を教授し、後に東京英和学校（男子高）の神学部長を務める、１８９６年に離日している。

エリオット (William Elliot)は１８８９年来日。富山の中学校と広島の師範学校で英語を教授し、Handbook of Oral Reading (Tokyo: Maruya, 1905)を出版している。彼は１９０９年に離日している。

コーツ (Harper Havelock Coates) は１８９０年来日。津の中学校、師範学校で英語を教授。後に青山学院神学部長となる。名古屋で逝去した。

彼等は御雇外国人教師として数年間、各地方の中学校、師範学校で英語を教えた。その後はカナダ・メソジスト・ミッションの宣教師として各地で伝道、あるいはミッションスクールで伝道と教育にたずさわっていた。そしてその間に１度は北陸伝道に参加しており、金沢英学院での英語の教授に加わったのではないかと思われる。手塚立磨氏は「カナダ・メソジスト・ミッションの教育活動」の中で、彼らが人格的にもキリスト教者として尊敬に価する人物達であったこと、伝道のみならず日本の英語教育に貢献していること、そして彼等を呼び寄せたのがイビーであることはあまり知られていないが、イビーが組織した自給伝道隊が日本の英語教育にのこした業績はYMCA Teachersの貢献と共に忘れてはならない[31]、と述べている。もちろん、明治期の外国人宣教師たちが英語教師として活躍したことは一般に良く知られている事実である。しかし、歴史を誇るミッションスクールが、現代になって学校の百年史等で英語教師としての宣教師を紹介する以外、彼等が実際にどういう英語教育をしていたか知ることはない。金沢英学院も同様で、学院の記録がないため宣教師たちがどのような英語教育をしていたか知るのは不可能である。しかし、マッケンジーの場合、次章で述べる英語教授法と彼が作成したテキストブックによって彼の英語教育がわずかながら考察ができるのである。

後藤田　遊　子

4．マッケンジーの英語教授法

先に述べた、マッケンジーの「得意のNatural Method」というのは、マッケンジーが採用した教授法の総称である。Natural Methodとは文法主義、訳読主義への反動として１９世紀後半登場したもので、親から子へあるいは環境が子供に働きかけると同様な言語学習因子を重視し、音声面の指導を重視したものである[32]。この方法を有名にした学者の１人がフランス人グアン（Francois Gouin ）であった。マッケンジーはグアンによって考案されたGouin Methodと呼ばれる教授法を使って、英語教授をしテキストブックを出版したのである。

ここでGouin Methodを簡単に紹介する。これは「心理的教授法」と呼ばれるのであるが、それは幼児が母国語を習得する自然な方法とその心理的過程を外国語教授法に応用したからである。すなわち、

(1) 幼児はまず聞くことに慣れ、続いて話すことに移行する。

(2) 幼児は１語１語覚えるのでなく、ある概念を文の単位で覚える。

(3) 思想や行動の順序に従って言葉を用いる。

(4) その順序に従うと連想が豊かになり、記憶が促進される。

彼は１連の連続的動作からなるSeriesというものを作って、それを表す表現を動作の順に配列した。これが彼の方法の最も大きな特色である。たとえば、“ I open the door. ”というSeriesは次のような諸動作からなっている。

I walk toward the door.	I walk
I draw near to the door.	I draw near
I get to the door.	I get to
I stop at the door.	I stop
I stretch out my arm.	I stretch out
I take hold of the handle.	I take hold
I turn the handle.	I turn
I open the door.	I open
I pull the door.	I pull
The door moves.	moves
The door turns on it's hinges.	turns
The door turns and turns.	turns
I open the door wide.	I open
I let go the handle.	I let go

この指導法は、

(1) 教師は、扱う場面あるいは、話題の内容を母国語で説明する。

(2) 教師はある場面における出来事を、自分は何をしているかを外国語で言いながら演じる。

(3) １つ１つの行動が個々に演じられる。

(4) これらはまず口頭で、続いてwritingに進む。

以上がGouin Methodの基本的な教授法である[33]が、Gouin Methodはグアンの著書“ The Art of Teaching and Studying Languages ”の英訳者の一人である英国人スワン（Howard Swan）が、招待を受け来日し、１９０２年（明治35年）東京高等商業学校（現在の一橋大学）における文部省夏季講習会に１００名以上の講習員を集めて、新教授法として紹介したものである[34]。

マッケンジーは実はその同じ年にGouin Methodに基づいた英語のテキストブックを１冊、そして１９０７年に２冊目を出版している。つまり、マッケンジーはスワンが日本にGouin Methodを紹介する以前にもうこの教授法に着手していたのである。そのテキストブックは

（１）Natural Method Exercises in Japanese And English 1902年

（２）Natural Method Exercises in Japanese And English 2 -Agricultural Series-1907年

共に大阪の福音社書店から出版されたものである。

次に、マッケンジーが出版したテキストブックから、Gouin Methodの応用例を紹介する。（１）のテキストブックから、マッケンジーが用いたシリーズの諸動作の１例を以下に紹介する[35]。 英文と日本語訳文のシリーズが両ページに掲載されていて、両方を検討しながら練習することができるようになっている。

1.—TAKING A DRINK OF WATER.

I cȯme† īn frŏm ạ wạlk.	come in
I sīt down in mȳ stŭd'y.	sit down
I fēel thīrs'ty.	feel
I wạnt (*or* wȧnt) ạ drink [drĭngk] of [ŏv] [wạ'tẹr.	want
On [ŏn] ạ tā'ble nēar bȳ I sēe ạ trāy.	see
On thẹ tray thêre īṣ ạ wạ'tẹr-pĭtch'ẹr.	is
Bẹ-sīde' thẹ pĭtch'ẹr there is ạ glȧss.	is
I rīṣe from my chair.	rise
I gō ō'vẹr tọ thẹ ta'ble.	go over
I stȧnd be-side' the ta'ble.	stand
I strĕtch (pût) out my hȧnd.	stretch out
I tāke hōld of the hăn'dle of the pitch'er.	take hold of
I lĭft the pitch'er.	lift
I tĭp the pitch'er.	tip
The wa'ter flōwṣ out of the pitch'er.	flows out of
The wa'ter fạllṣ īn'tō thẹ glass.	falls into
Sōon the glass is fĭl*led*.	is filled
Thĕn I sŏt the pitch'er down ŏn the tray.	set...down
I lift the glass to my lĭps.	lift
I take a swȧl'lōw of the wa'ter.	take
I take ạn-ōth'ẹr swal'low.	take
I drink ạll the wa'ter in the glass.	drink
I pût the glass down ōn the tray.	pût...down
I tūrn a-round'.	turn around
I go bȧck to my chair.	go back

9. hēr, sīr; 10. īce, bȳ; 11. sīt; 12. nō; 13. nŏt, whȧt; 14. ūse; 15. bŭt, sŏn; 20. out, owl.—e=k; ç=s; ġ=j; ṣ=z; th *as in* they; ẹ, ọ, ị, ọ, ụ, y, *obscure*.
† Letters in *Italics* are *silent*.

1.—IPPAI NO MIZU WO NOMU KOTO.

Sampo shite kaerimasu.	kaerimasu
Benkyō-beya ni suwarimasu.	suwarimasu
Nodo ga kawakimasu.	kawakimasu
Mizu ippai hoshii desu.	hoshii desu
Soba ni aru tsukue no ue no bon wo mimasu.	mimasu
Bon no ue ni mizu-sashi ga arimasu.	arimasu
Mizu-sashi no soba ni mizu-nomi ga arimasu.	arimasu
Isu wo tachimasu.	tachimasu
Tsukue no soba ni yukimasu.	yukimasu
Tsukue no katawara ni tachimasu.	tachimasu
Te wo dashimasu.	dashimasu
Mizu-sashi no te wo mochimasu (nigirimasu).	mochimasu
Mizu-sashi wo agemasu.	agémasu
Mizu-sashi wo katagemasu.	katagemasu
Mizu ga mizu-sashi kara nagare-demasu.	nagare-demasu
Mizu ga mizu-nomi koppu ni hairimasu.	hairimasu
Jiki ni mizu-nomi koppu ga ippai ni narimasu.	narimasu
Soko de mizu-sashi wo bon ni okimasu.	okimasu
Mizu-nomi wo kuchi-moto ye agemasu.	agemasu
Hito-kuchi nomimasu.	nomimasu
Mō hito-kuchi nomimasu.	nomimasu
Mizu-nomi no mizu wo nomi-hoshimasu.	nomi-hoshimasu
Mizu-nomi wo bon no ue ni okimasu.	okimasu
Muki-mawarimasu.	muki-mawarimasu
Isu ni kaerimasu.	kaerimasu

1. hāte; 2. bŭt; 3. ärm; 4. ȧsk; 5. cȧre, thêre; 6. cạll, fọr; 7. mē; 8. mĕt; 16. trûe, môve; 17. fûll, wŏlf; 18. bürn, wŏrd; 19. oil, boy;

後藤田　遊　子

2）のテキストブックは前のよりすこし程度が高く、複文や重文が含まれているが形式は全く同じものである。1）と同様の形式の1シリーズを以下に挙げる[36)]。

1.—GETTING READY FOR WORK.		1.—SHIGOTO NO JUMBI WO SURU KOTO.	
1. Sprĭng hăṣ cóme.†	has come	1. Haru ni narimashita.	narimashita
2. Thẹ bīrdṣ ăre sĭng'ĭng gaĭ'ly in the trēes.	are singing	2. Tori ga tanoshige ni ki ni saezutte imasu.	saezutte imasu
3. The snōw has nēar'ly all mĕlt'ẹd ạ-wāy'.	has...melted	3. Yuki ga taigai tokete shimaimashita.	tokete shi'ta
4. Ōn'ly a lĭt'tle rẹ-māinṣ' in shĕl'tẹred nôoks.	remains	4. Hon no sukoshi hi-kage no sumi-zumi ni nokotte imasu.	nokotte imasu
5. The frost is all out of the ground.	is	5. Shimo ga shikkai naku narimashita.	naku narimashi
6. The fărm'ẹr is glăd that the spring has come, for he căn now bẹ-gĭn' to cŭl'tĭ-vāte (tĭll) hĭṣ fiĕldṣ (ground).	is glad has come can...begin t. c.	6. Hyakushō ga haru ni natta no wo yorokonde imasu, naze nareba hatake wo tagayasu kotó ga dekiru yō ni narimashita	natta yorokonde imas tagayasu k. g. d
7. The farmer gōeṣ to his stōre'house'' (bärn), ănd lôoks ō'vẹr his ĭm'plẹ-mẹnts (tôolṣ).	goes looks over	7. Hyakushō ga naya ye yukimashite, [kara. dōgu wo shirabemasu.	yukimashite shirabemasu
8. Sóme of [ŏv] thĕm are in nēed of rẹ-pâirṣ'.	are in need	8. Sono naka ni wa shufuku seneba naranu mono mo arimasu.	shufuku s. n. arimasu
9. The plow mŭst hăve ạ new [nū] point, for thē ōld one [wŭn] is vĕr'y mŭch wōrn.	must have is...worn	9. Karasuki wa atarashii ha wo tsukeneba narimasenu, naze nareba furui no wa taisō hette imasu kara.	tsukeneba n. hette imasu
10. The hăr'rōw must be mĕnd'ẹd, for the frāme is lôose, and some of the tēeth are gŏne [or gọn].	must be mended is loose are gone	10. Mangwa wa shufuku seneba narimasenu, naze nareba dai ga yurunde, ha no nuketa no mo arimasu kara.	shufuku s. n. yurunde nukete...arima
11. The hăn'dle of one of the spādeṣ is cracked* and must be chănged (rẹ-plăced' [by a new one).	is cracked must be changed are	11. Suki wa hitotsu e ga warete imasu kara tori-kaeneba narimasenu.	warete imasu tori-kaeneba n.
12. The hōeṣ are dŭll, and must be shārp'ẹned.	must be sharpene	12. Kuwa wa namatte imasu kara, togeneba narimasenu.	namatte imasu togeneba n.
13. One of the prŏngṣ of a thrēe'-prŏnged'' hōe is bĕnt, and must be strāight'ened.	is bent must be	13. Mitsuguwa no ha wa hitotsu magatte imasu kara naosaneba narimasenu.	magatte imasu naosaneba n.
14. The farmer goes to wŏrk, and sôon has all the implements rĕad'y for ūse.	goes to work has	14. Hyakushō ga shigoto ni kakatte, ma mo naku dōgu ga mina totonoemashita.	kakatte totonoemashit

9. hēr, sīr; 10. ice, bȳ; 11. sit; 12. nō; 13. nŏt, whăt; 14. ūse; 15. bŭt, són; 1. hāte; 2. hăt; 3. ärm; 4. ăsk; 5. cāre, thêre; 6. call, fọr; 7. mē; 8
20. out, owl.—c=k; ç=s; ḳ=j; ṣ=z; th as in them; ạ, ẹ, ĭ, ọ, ŭ, ỵ, *obscure*. 16. trūe, môve; 17. fŭll, wŏlf; 18. bŭrn, wŏrd; 19. oi
*erăkt. Note that *ck* always equals *k*. † Letters in *italics* are *silent*.

発音記号に関しては、Worcester,　Websterを利用している。主に母音記号そして必要な場合に子音記号が各単語につけられている。アクセントに関しては1音節以上の単語には表示してある。発音記号を分かりやすくするために、その発音記号を持つキーワードが各ページの下段に表示してある。

マッケンジーは以上のような内容のテキストブックを作成したわけであるが、彼がその作成理由を述べた（1）のテキストブックの序文を以下に引用する。

「このテキストは自習課題として準備されたものですが、教授用にも使うことができます。この教授法はProf. F. Gouinの著書“ Art of Teaching and Studying Languages ”に基づいています。授業に使いやすい練習方法の必要性、そして英語を学ぶ日本人学生がより広範囲に使えるようにという狙いで出版することになりました。学生が正しい発音になるようにと発音記号も付け加えられています。もし教師がこの本をクラスで使うなら、効果的な授業ができるように、前述の

Prof. Gouinの本を参考にするのも良いでしょう。というのは、学生がこの本の練習課題を習得してもまだ初歩レベルの段階だからです。この本の練習課題には“Domestic Series”というタイトルがついていますが、それは選んだ主題の範囲をさしています。 実際には、身近な生活のあちらこちらから選んだわずかな練習課題しかありません。より完全なものにするには時間が足りませんでした。誤りのないようこころがけましたが、かなりの間違いが指摘できると思います。それらが確信的なものでないことを願っています。日本語の部分は日本人の男性方に頼みました。彼らの助け無しでは本の発行に至らなかったでしょう。最後に修正と校正を手掛けてくださった金沢の倉長牧師に心から感謝します。“English Letters and Their Sounds,”から“Table of The Twenty Vowel Sounds,”を使用すること、 そして同書からいくつかの発音のルールを引用することを快く許可をくださった Bradbury氏にも感謝いたします。 D.R. McK. １９０２年１０月１８日 金沢　加賀[37]。」（筆者訳）

発音に関しては上記以外に、（１）のテキストブックの序説でもその必要性を述べているのでその内容を一部引用してみる。「これまで日本人学生に英語を教授してきたが、彼等にとって英語の正しい発音を習得することが容易でないことが分かった。そこでこのテキストでは発音記号も導入することにより効果が上がるようにしている。[38]」（筆者訳）、また、（２）のテキストブックの序文には、例文の日本語訳に関して石川県立第一中学校のMr. S. Watanabeに大変お世話になった[39] ことが記されている。

マッケンジーが日本でGouin Methodが紹介される以前からこの教授法をもとに英語教授をしていたのはどういう根拠があってのことかは推測するしかない。グアンはその著書の中で、古典語は文法翻訳だけでもよいが、ドイツ語のような生きた言語には文法の知識も翻訳主義も役に立たない、訳読式ではだめだと言っているのである[40]。マッケンジーがこの点に注目したかどうか知りたいものである。文法、訳読中心主義の日本の英語教育学会に、当時ヨーロッパで盛んに行なわれていたNatural Methodの１つであるGouin Methodが紹介された時、文部省をはじめ日本の英語関係者達は期待してこの講習会に大勢がつめかけ、反響を巻き起こした。しかしその導入には賛否両論があり、子供が言葉を聞きまねるところから入って自然に覚えろと言うのはもっともだが、いまさら急に子供に生まれ変わるわけにもいかず、この方法はNaturalではなく Unnatural Methodで、「グアン式は愚案式なり」[41]と決めつけた英語教師もいたほどで、結果としてはあまり採用されずに終わった。当時の英語教育は、発音が軽視され、文字を読むことが重視されていた。また、「英文学」を重視し、現代語を聞き話す「英語」が軽んじられるといった傾向であった。そしてこれはとりもなおさず、文字中心の古典的漢学と蘭学の影響が英語教育にまで根強く影響を及ぼしていたためと言える。しかしながら、新教授法の講習会に大勢が期待して詰めかけたのは、英語教育の現状に対する不満と改善の必要性を多くの者が感じていたと思われる。こうした状況のもとで、マッケンジーがNatural Methodを実践し、テキストブック作りをし、文部省夏季講習会でこの教授法を使って模範授業をしていた事実は特記すべきことである。

１９０２年と１９０７年の２回にわたってテキストブックを出版していることから、この期間

後藤田　遊　子

Gouin Methodを使った英語教授をしていたと思われる。また、高い評価を受け、彼が東京に移動した後もこのテキストブックが売れていた[42]という評価がある。金沢英学院の英語教育は、マッケンジーの教授法が明らかにされることによって、マッケンジーを中心に、この間に活動に加わったであろう自給伝道隊の宣教師、英語が堪能な日本人牧師や伝道師等によって、文法、英文学や戯曲等の訳読ばかりでなく、時代を先取りする英語が教授されていたことが考察できるのである。

まとめ

中高等学校教育が整備されていったにもかかわらず、英語教育の水準、内容に統一性を欠き、英語教師はその教授法に、学生は勉強方法に暗中模索の時代であった。金沢英学院で学んだ者達はこうした現状のもと、宣教師や伝道師から英文学を始め、マッケンジーの教授法による英語を学んでいたわけである。学校の英語授業だけでは受験勉強には不足であるという金沢の中高等学校の現実問題に応じるため金沢英学院は高等予備校化した。金沢英学院は、日本の教育制度がミッションスクールに不利な時代に、中高等学校の不足を補う英語教育をおこない、各種学校の形態で学校の存続を維持していたといえる。

マッケンジーのNatural Methodについてであるが、それが受験勉強に役だったかどうかは分からない。しかし、生徒は中高等学校生ばかりではなく教師や役人、英語を学びたい青年がいた。Natural Methodという新しい教授法の導入、独学と授業の両方に使えるテキストブック作成に至るには、幅広く応用できる新しい教授法が必要であるとの認識があったであろう。その英語教授法は、日本人が好む訳読法とは異り現在よく言われる、使える英語や生きた英語の走りだったのである。大正時代になり、１９２２年に英語学者で英国人のパーマー（Harold E. Palmer）が来日し、彼を中心としたOral Method（口頭作業を重視した教授法）等の新教授法が日本の英語教育に影響を及ぼし、使える英語や生きた英語が叫ばれる現代に引継がれていった。グアンはパーマー以降の新教授法のパイオニア的役割を果たした[43]と言われているが、マッケンジーは実践のパイオニアと言えよう。

中高等学校の補完の役割を担い、時代を先取りするNatural Methodという新教授法を実践した金沢英学院は、マッケンジーが去った後の年月も合わせると５０年あまり続いたものの、現代までには至らなかった。そのため、その英語教育活動の歴史は広く世間には知られなかったが、地方都市金沢で確かに行なわれていたのである。

引用と参考文献

1. Minute of the Board of Foreign Missions 1935
2. 『教会小史　日本メソジスト金沢教会50年記念』日本基督教団金沢長町教会　1940年 p. 40-41
3. ibid., p. 2
4. Life Sketches of The Missionaries in Japan　Box4-52　p. 555
5. 『関西学院の100年』関西学院100周年記念事業委員　1989年　p. 40
6. 『関西学院百年史1889-1989通史編１』関西学院百年史編纂事業委員会 1997年 p. 25
7. The United Church Record, May 1935 p. 16
8. 『石川県史第四編』石川県　1931年 p. 660
9. The Missionary Outlook, October 1890 p. 159
10. 『教会小史　日本メソジスト金沢教会50年記念』日本基督教団金沢長町教会　1940年 p. 1
11. The Missionary Outlook, October, 1890 p. 159
12. 『教会小史　日本メソジスト金沢教会50年記念』日本基督教団金沢長町教会　1940年 p. 33
13. 「日本メソヂスト金沢部会記録」1908年 p. 74
14. 『石川県教育史第一巻』石川県教育委員会　1974年 p. 415
15. 村口一雄　『金沢市教育史稿』第一書房　1982年 p. 332
16. 『教会小史　日本メソジスト金沢教会50年記念』日本基督教団金沢長町教会　1940年 p. 33
17. 今井一良「北陸英和学校と金沢英学院--金沢にあった２つのミッショ ン系男子校の歴史」『北陸英学史研究第８輯』1997年　p. 29
18. 『教会小史　日本メソジスト金沢教会50年記念』日本基督教団金沢長町教会　1940年 p. 41-42
19. 今井一良「北陸英和学校と金沢英学院--金沢にあった２つのミッショ ン系男子校の 歴史」『北陸英学史研究第８輯』1997年　p. 29-30
20. 『教会小史　日本メソジスト金沢教会50年記念』日本基督教団金沢長町教会　1940年 p. 29
21. 『石川県教育史第一巻』石川県教育委員会　p. 573
22. 『金沢一中・泉丘高校百年史　前編』金沢一中・泉丘高校百年史編集委員会　橋本確文堂 1993年 p. 25
23. 『教会小史　日本メソジスト金沢教会50年記念』日本基督教団金沢長町教会　1940年 p. 31
24. 『富山二番町教会百年史第一部 』日本基督教団富山二番町教会　1993年 p. 44
25. ibid., p. 46
26. 『英語教授法事典』語学教育研究所　開拓社　1972年 p. 90
27. 大村喜吉　『英語教育史資料第２巻　英語教育理論、実践、論争史』1978年 p. 366
28. 『甲府教会百年史』　甲府教会百年史編纂委員会　シャローム印刷　1979年 p. 26
29. ibid., p. 49
30. ジャン・W・クランメル『来日メソヂスト宣教師事典』教文館　1996年
31. 手塚竜磨　「カナダメソジストミッションの教育活動ー女子教育を中心として」『英学史研究５号』日本英学史学会　1972年 p. 38
32. 田崎清忠　『英語教育理論』　大修館　1978年 p. 178
33. 坂田直己編　『英語重要用語３００の基礎知識』栄泰書館　1981年 p. 55
34. 大村喜吉　『英語教育史資料第２巻　英語教育理論、実践、論争史』1978年 p. 359
35. D. R. McKenzie　Natural Method Exercises in Japanese And English　福音社書店 1902年 p. 2-3
36. D. R. McKenzie　Natural Method Exercises in Japanese And English 2 - Agricultural

後藤田　遊　子

Series－　福音社書店　1907年 p. 2-3
37. D. R. McKenzie　Natural Method Exercises in Japanese And English　福音社書店　1902年　PREFACE
38. ibid., INTRODUCTION
39. D. R. McKenzie　Natural Method Exercises in Japanese And English 2－Agricultural Series－　福音社書店　1907年　PREFACE
40. 『英語教授法事典』語学教育研究所　開拓社　1972年 p. 103
41. 大村喜吉　『英語教育史資料第２巻　英語教育理論、実践、論争史』1978年 p. 114
42. Life Sketches of The Missionaries in Japan　Box4-52　p. 555
43. 高梨健吉、大村喜吉　『日本の英語教育史』大修館　1975年 p. 144

付記

(1) 日本メソジスト金沢教会は、１９１０年に金沢市広坂に移転し講義所から正式に教会となる。１９２６年にはカナダ・ミッションから独立し、自給教会となる。１９４０年に日本基督教団の結成にともない、名称を日本基督教団金沢広坂教会と改める。１９５５年に現在の金沢市長町に新会堂を建築し、名称を日本基督教団金沢長町教会と改め現在に至る。

(2) マッケンジーが使用したテキストブック１）の序文の後に添付されている２０の母音記号を参考に載せておく。

THE TWENTY VOWEL SOUNDS. .

1.	ā	as in	hāte
2.	ă	,, ,,	hăt
3.	ä	,, ,,	ärm
4.	å	,, ,,	åsk
5.	â	,, ,,	câre (also ê as in thêre)
6.	ạ	,, ,,	cạll (,, ọ ,, ,, ọr)
7.	ē	,, ,,	mē
8.	ĕ	,, ,,	mĕt
9.	ē	,, ,,	hēr (also ī as in sīr)
10.	ī	,, ,,	īce (,, ȳ ,, ,, bȳ)
11.	ĭ	,, ,,	bĭt (,, ỹ ,, ,, mỹriad)
12.	ō	,, ,,	nō
13.	ŏ	,, ,,	nŏt (also ȧ as in whȧt)
14.	ū	,, ,,	ūse
15.	ŭ	,, ,,	bŭt (also ȯ as in sȯn)
16.	ů	,, ,,	trůe (,, ȯ̊ ,, ,, mȯ̊ve)
17.	û	,, ,,	fûll (,, ȯ ,, ,, wȯman)
18.	ü	,, ,,	bürn (,, ö ,, ,, wörk)
19.	oi	,, ,,	oil (,, oy ,, ,, boy)
20.	ou	,, ,,	out (,, ow ,, ,, now)

あとがき

これまで、１９世紀終わりから２０世紀始めの日本や韓国における外国人宣教師達の活動を調査してきたが、そのたびに彼等がキリスト教伝道を確実にするために、その国の言語を習得することから始まり、聖書をその国の言語に翻訳し、さらにはその国の政治社会文化等を学び、教育事業、社会事業にまで参加していく、その活動の広さと熱意に圧倒されてきた。まさにパイオニア精神の原点を見る思いであった。今回マッケンジー宣教師の英語教育活動を執筆するに当たって、彼に関する資料や日本におけるカナダ・メソジスト・ミッションの資料を整理していくうちに、やはり同様のキリスト教信仰に基づいたパイオニア精神を見たのである。本稿では、教育活動に焦点を充てたが、伝道活動、さらには社会福祉活動にまで調査を進めるなら、ますますその活動領域の広さと深さを知らされるだろうという思いである。

本稿をまとめるにあたって、日本基督教団金沢長町教会、平野克己牧師に多くの助言をいただいたことに感謝の意を表する。